

# 春燈

8月号

August 2012



主宰の句

安立公彦

多佳子忌を真間の継橋踏み惑ふ（市川）

釈迦堂の昼の灯冥き安居かな（成田）

玉杯に頒つ冷酒や紅緑忌

ただ青き夏野となりて人を呼ぶ

わが声の四囲に消えゆく夏野かな



# 久保田万太郎の句

## よろこびのおのづとみづのぬるみけり

佐々木有風句集「杖として」の扉 昭和三十一年

飯田蛇笏の一番弟子だった有風が満洲から引き揚げて来て戦犯として公職追放中に上梓した、句業五十年の中から自選した「杖として」七百七十一句への祝吟である。

戦時中「文学報国会」の中国慰問視察団として中国へ赴いた折、東拓の哈爾濱支店長、日滿製粉社長など、旧満洲帝国実業会の重鎮だった有風が、万太郎を手厚くもてなしたことへの挨拶と稿いの一句と考えられる。

小張 昭一

久保田万太郎の句

白足袋のすぐに汚れてあたゝかき

「春燈」昭和二十九年

陰翳礼賛といえど叱られそうだが、くらしの影をもたない足袋の真白さはつまらない。履けばその人なりの皺も汚れも生まれる。その汚れを「あたゝか」と詠んだ。何かいい事がありだったのか、あたたかさは心の温かさ、畳を摺る爽やかな音が聞こえるようだ。

「汚れつちまつた悲しみに……中也」の青春の甘美とは勿論異質だがどちらにも自愛の投影がみられる。

諸岡孝子

# 燈下集



○ 高橋和女

みちのくの地霊みなぎる芽吹かな  
的を射る夫の苦言の草矢かな  
青春の尻尾啜へて燕来る  
黴の香や跳ぬる勢の寺宝絵馬  
苔の花母の忌修す子ら老ゆる

○ 上野昌子

「のれそれ」は黒目のちの稚魚穴子  
空よりも川に吊らるや鯉幟  
鯉幟空泳ぐのを止めしは何時  
ひつそりと遠慮勝ちなる額の花  
天体ショー続く五月も果てにけり

○ 和田孝村

うごき出す貨車の鳴咽や夏来たる  
目高よりおどろき易き水なりけり  
はたらける人に家路や桐の花  
泥亀の泳ぎつたなし走り梅雨  
白地着て他郷のくらし永かりけり

おもしろう生きて晩節古浴衣  
ジャズが似合ふメリケン波止場聖五月  
老鶯の女人高野を離れざる  
気丈女の乳房ゆらして筍掘る  
生きてゐればこそその薫風辰雄の忌

○ 中村喜美子

命つなぐ朱鷺の誕生風薫る  
俎板にうつる紫蘇の香雨催  
江戸の粹版画に込めて夏を彫る(倅・徳・様)  
半夏生一服の茶に癒さるる  
薔薇の香やひとりの闇に匂ひたつ

○ 乗鞍三彦

守宮出て金環日蝕待ちみたり  
あまがへる一念天に通じけり  
夏草刈る五尺四寸の身を埋め  
夏草刈るなさけ無用の鎌をもて  
夏草刈る積もりし憂さを晴らすごと

○ 柴崎甲武信

小旅よりとりどりの猪口夏料理  
筍の匂を肴に竹の盃  
せせらぎへ弾む鳥語や新樹光  
露天湯の淵より立ちぬ万緑嶺  
万緑の木洩れ日現ず金環蝕

○ 近藤牧男

霞切や行つたつきりの風ばかり  
さへづりといふ存分の言葉かな  
町中にわつと咲きたるつつじかな  
夏雲やゆくてゆくての松の幹  
月涼しひとりにひとつづつの座よ

○ 吉澤恵美子

青時雨風の匂ひの観世音  
かたつむり葉裏に思案かさねけり  
紅薔薇ころ燃ゆるが生くること  
青葉木菟月かげ森を深くせり  
金環日蝕清和の天をつなぎけり

○ 卜部黎子

糸口の見えて薪茶を汲みにけり  
母の日の妣へその後の片便り  
更衣昨日とちがふ風はおる  
夏帽子選ぶ鏡をゆづり合ひ  
背きても心かよはずアマリリス

# 当月集

安立 公彦選



○ 物江康平

笹舟に春の愁ひを乗せ流す

沈黙を通せし虜囚夜の蚯蚓

桜蕊大地に化粧紅を差す

言ひたきを二伸に託す行々子

万太郎を知る墓なるや本覚寺

○ 小山繁子

子の髪を梳く母のゐて柿若葉

人声に首のぼし寄る羽抜鶏

屋号もて呼び合ふ母郷青田風

桐咲くや母おもふ日のことのほか

螢火の消えゆく闇をおもひをり

○ 宮崎紗伎

さくらんぼときめく色に朝の卓

柿の花ほろほろ散るや親不孝

帯留は母の指輪や額の花

遠雷や明日焼く麴麴の生地ねかせ

追焚きの湯玉浮き立つ走り梅雨

○ 中嶋昌子

七七忌明けてひとりや若葉雨

悲しみの澱となりゆく夏落葉

余花白し亡夫の傍へにゐるごとく

夫ありし日や筍飯をうす味に

五十年てふ歲月なりし夏の月

○ 藤原若菜

夏の雲金環蝕を過ぎてより

石楠花のほほけそめたる人出かな

肌裂きつ古木となんぬ榊若葉

いをの恋蓮の浮葉を乱しけり

切通抜けて此岸の薄暑かな

# 春燈の句

安立 公彦選

鉄線花奉書の白に咲きにけり

千葉 神田 恵琳

浮き沈むほうたるの闇沖繩忌

瀬戸内のけぶる島なみ走り梅雨  
万緑の底に鎮むやかづら橋

夫の背に病葉ひとつ風立ちぬ

竹ざるの青み重ぬる夏の店

あめんぼう天水桶のせまずぎる

髭みせて沈むどちやうや桶の中  
ほんのりと立夏の朝日頬にしむ

堀辰雄繙く青野風立ちぬ

東京 土屋 光男

歳月や妻の遺愛の薔薇香る

江戸締めにつられ加はる三社祭  
ひと振りの鍬の軽さや夏はじめ

ぎこちなく孫を抱くや薔薇の昼

濃紫陽花きれいな月の上りけり

大西日離陸の一機きらめけり

夫と立つ朝の菜園遠郭公

群青の空よりこぼれ雀の子

宮城 西川 春子

瑞山によき里人やわらび取り

潮入の川のさざ波風薫る

つばくらはや旅立つ子等に思ひ寄せ

光琳展紫紺極むるかきつばた

遍路杖の鈴の音ひびく鶴林寺

杜若秘めたるいろを伝へけり

人恋へば闇にとけゆく夕牡丹

東京 河崎 國代

シャンパンの音清々し六月婚

旅を手にていねいに摘む山椒の実  
紫陽花のけさの瑠璃色母の色

埼玉 市川 玲子

宮城 熊谷 清子

千葉 吉村さよ子





# 余言

安立公彦

結葉のそよげば樹下に日の緋

片桐てい女

今年の燈下会総会は、五月二十九日に千葉県市川市で催された。市川は緑の多い土地でまた文教の街でもある。三月号の「五風十雨日録」にも書いたが、万葉の頃からの伝記も多い。当日は午前中総会、午後は鍛錬句会だった。

「結葉」は、茂った若葉が交わり、恰も結ばれたような形になる様を言う。観察の効いた季節感のある季語だ。

作者はいま小高い樹の下に、その結葉の日の影を見ている。薫風にそよぐ若葉が樹下に日の斑を結び、それは織物の「緋」を連想させた。総会当日の句。観察の良く効いた表現である。手児奈霊神堂辺りの風景が浮かんでくる。

斑猫や水ゆたかなる真間の里

上山 永晃

一読懐かしい思いのする句だ。真間の地は古くは下総国葛飾郡真間と称した。水原秋櫻子の名作『葛飾』の題名もここに由来する。真間の地は西側を流れる江戸川に沿う。この句を見てみると、中学生の頃読んだ藤村の詩がおぼろに浮かんでくる。「水静かなる江戸川の／ながれの岸にうまれいで／岸の桜の花影に（略）」。大方の人が一度は手にした『石叢集』の一節だ。

「水ゆたかなる真間の里」がいい。しかしこの句は回想の句ではない。「斑猫」が読者を現実引き戻す。

継橋を過客の渡る薄暑かな

松橋 利雄

「継橋」は真間の継橋。奈良時代この辺りは江戸川の入江だった。付近には砂州が列を成し、その砂州を結んでいたのが継橋。資料によると真間の入江に杭を打ち、その上に板を並べ渡したとある。今見る三步で渡れる継橋とは異なり、或る程度の規模のものだったらしい。

この句はその継橋を、「過客の渡る」と表現する。「過客」と言えば『おくのほそ道』冒頭の「百代の過客」。わが身をひと刻「過客」と見る思いが、「継橋」と絶妙に照応している。燈下会総会の鍛錬句会で時々選に頂いた。

移り住めば真間人ならむ花は葉に

橘 正義

「市川」の前書がある。この句、前に掲げた三句と異なり、視点を作者自身の思いとしているのが独得だ。

この句を見ると、「真間人」に対する作者の姿勢が感じられてくる。その姿勢はこの地へのほのかな愛情と許谷であり、それはまた一旅人としての当地への挨拶でもある。みごとに挨拶句だ。

葭簀張つて万葉の道ジャズの町 三上 程子

JR市川駅前から、弘法寺に向かう大門通りには、さまざまの店が並んでいる。この通りは途中真間川を渡り、前に書いた継橋を経て真間山弘法寺の高い石段に至る。いわば「万葉の道」と言ってもよい。

作者は今その道を帰りつつ、往きには見かけなかった一軒の「ジャズの店」に気付く。注意して見るとこのジャズの店は一軒だけではない。それは近くに国公立、私立の大学が多く、若ものの多いのも一因ではないか。「万葉の道」と「ジャズの町」の取り合わせが出色だ。

版画展ひらく天上朴の花 鷹崎由未子

燈下集の長浜徳三さんが、四月三十日に亡くなられた。四月八日頃であったか、徳三さんの出句がまだ届いていなかった。ので電話すると、奥様が出られて一昨日入院したと言われた。その後選句などに取り紛れている中で訃報を聞いた。思っ

てもみないことだった。

長く東京句会（現本部句会）を取り仕切りまた後進を育て、その功績が大きかった版画の技はプロ級だった。

この句、徳三さんを悼み、天上でも版画展を開いて下さいと語り掛けるように表す。「朴の花」が適確だ。深悼。

はたらける人に家路や桐の花 鈴木 直充

この句を見ると、武者小路実篤を中心とする白樺派の、「人生肯定」の香りが漂ってくる思いがする。

「はたらける人」がいい、「家路」がいい。夏の夕暮れ桐の花の咲く路地には、帰りを待つ家がある。表現の具体化により、十七文字で情景が瞭然とし、作者の思いが伝わって来る。これが秀句の良さだ。この句、五月の本部句会で特々選に頂いた。

七七日明けてひとりや若葉雨 中嶋 昌子

同時発表の句に、〈余花白し亡夫の傍へにゐるごとく、  
〈五十年てふ歳月なりし夏の月〉がある。先頃急逝された夫君への追慕の思いが読み手の胸に迫る。こういう真実の句に付け足す言葉は無い。四十九日の法事も終わり張りつめていた気持の急速に失われてゆく思いが、「ひとりや」に良く出ている。作者と同齢と見られる女性会員の夫君の訃がこの私の知る限りでお三方もあった。深悼。